W.G. アストン『日本文語文典』初版 訳注稿（４）

遠藤　佳那子

［45］

第５章（Chapter V.）

活用しないテニヲハ

（UNIFLECTED TENIWOHA.）

I.「名（な）」に接続するもの（Suffixed to *na*.）

1. 格の接尾辞（Case Suffixes.）

以下に述べるテニヲハは、他の言語における格語尾の位置を占める。これらは活用しない語の後だけでなく、活用する語における名詞の機能を有する形式、例えば語根（root）または副詞形式（adverbial form）、実名詞形式（substantive form）の後にも用いられる。

主格を区別する接尾辞は、無い。下記のように、「は」「が」は主格を表わすわけではない。

属格（GENITIVE CASE.）

「の」、「が」、「つ」または「づ」‘of’は、属格の標示（sign）である。

古代において、属格助辞「が」は動詞の実名詞形式といくつかの代名詞の後でのみ、例えば「たが」「わが」「きみが」「いもが」ように用いられていた。後世において「が」は無闇に用いられ、しばしば「の」との区別が無かった。従って「花の咲く」「花が咲く」の両方が、全く同じ意味 ‘the unfolding of the flowers.’ で現れる。

「が」が尊敬の言葉「きみ」に添加することから、この助辞の使用は一部の文法学者が想定するような侮蔑を含意しないことがわかる。

国学者は我々に「ガ、ノより重し」[1]、すなわち「が」は「の」よりも重いと述べる。その意味するところはおそらく、「が」は「の」よりも関連する単語間の近しい関係を表し、「が」は所有格（possessive）の意味を持ち、「の」は部分格（partitive）の機能であるということである。

二つの名詞でひとつの対象を示す際は、「いわみのくに」‘the province of Iwami’の例のように、両者を繋ぐ助辞は「が」ではなく「の」でなければならない。

「この人が出来る」‘this man’s being able’のような句は、話し言葉や通俗的な書物においてさえも、まるで意味が‘this man is able’であるかのように使われるようになってきている。元来の意味が完全に忘れ去られてしまったので、「が」は主格の標示と見なされるか、全く省略されるのである。終止形「でく」などは使用されなくなり、「でくる」（または時に「できる」）は連体形や実名詞形式だけでなく、終止形だと考えられている。*

*無学者や中途半端に教育された日本人は、主格のことを「が」格（「ガ カク」）と呼ぶことも少なくない。

[46]

「つ」または「づ」は、属格の助辞の古い形である。この言語の最も古い形、そして「おのづから」‘of oneself’や「みづから」‘of oneself’などのような複合語にしか見られない。

属格の助辞の例

月の夜、雪のあした。	A moonlight night, a snowy morning.
たれがしが婿になる。	To become such a one’s son-in-law.
己が悪いことの懺悔。	The confessions of one’s own sins.

[1] 「がはのに似てのよりも重し」（黒沢翁満『言霊のしるべ』中編、安政三年〈1856〉刊、『国語学体系』第2巻 p.94）

先の上も、今のも。	Both the former lord, and the prerent[3] one.
みやこえと思うもものの悲しきを帰らぬ人の有ればなりけり[2]。	Even with our joyous anticipations of returning to Miyako is mingled the sad thought that there are some who never will return.（この文では、「あれば」に基づいて、実名詞形式「ある」を、前置された「の」よりも前の部分の主格として補う必要がある。）
今の世の人のものせる文歌を見るに。	In reading the prose and poetical compositions of the men of the present day.
沖つ白波。	The white waves of the open sea

与格、所格、具格
(DATIVE, LOCATIVE, AND INSTRUMENTAL CASES.)

「に」‘in’や‘to’‘into’、「え」[4]と「がり」‘towards’、「まで」‘as far as’、‘until’はこれらの格の標示である。

「に」は時に、次の例のように、与格の名詞に位置する機能を持つ。

我に見せよ。	Show me.
人に預くる。	To give in charge to some one.
親に似る。	To be like one’s parents.

次は「to、in、into」を表す「に」の例である。

---

[2]「みやこへと思ふをもののかなしきはかへらぬ人のあればなりけり」(『土佐日記』十二月二十七日)「みやこえ」の「え」は、歴史的仮名遣いとしては「へ」と翻字すべきところだが、原文では「ye」と表記されるため「え」と翻字する。以下同じ。

[3] 原文ママ。present の誤植か。

[4] 脚注２参照。

江戸に行く。　To go to Yedo.
江戸におる。　To live in Yedo.
箱に入るる。　To put into a box.

「に」は次の例のように ‘along with’ の意味を持つ。

尾花が風に庭の月影[5]。	Along with the wind through the obana（草の一種）the moonlight in the courtyard.

[47]

「勇みに勇み」‘full of eagerness’(lit. along with eagerness being eager) のような表現において、「に」は同じ機能を持つ。

具格は、「にて」に続く名詞によって表現される。これは近代の準漢文体[6]の「を以て」と等価である。

例：血にて血を洗う。　To wash away blood by blood.

「にて」の「に」は、いくつかの場合においては、‘to be’ を意味する今は廃れた動詞「ぬ」の語根と考えなければならない。「にて」はその場合 ‘being’ を意味し、話し言葉の「で あって」と等価となる。

「に」は使役動詞と受動動詞とともに用いられ、その動詞が仮に能動他動の形式で用いられた場合に主語（subject）となる人物を示す。『通路』[7]で ‘causative’ ‘passive’ に対して使われる句は、この「に」の用法の例になる。

他に然さする。	Causing another to do.
他に然せらるる。	Being caused by another to do.

[5]「また秋のうれへの色にむかふなり尾花が風に庭の月影」(『玉葉集』秋上 535)

[6] 原文「semi-Chinese style」。漢文訓読体を想定したものか。

[7] 本居春庭『詞通路』（文政十一年〈1828〉序）。

その他の「に」の例

まことに。	In truth.
すみやかに。	Quickly.
六(む)つに分(わ)かるる。	To be divided into six.
歌(うた)よむに。	In composing poetry.
金(かね)になる。	To become metal.
台(だい)につくる。	To make into a table.
自(おの)づからなるものにして。	Making it to（accounting it）a thing which is produced of itself.
それに。	In adding to that.
ことによりて。	According to circumstances.
親(おや)に勘当(かんどう)せらる。	He was disowned by his parents.

「と」は時に「金になる」の例における「に」と同じ意味で用いられる。

例：人となる。　To become a man, to attain to manhood.

「え」‘towards’は、無頓着な日本人の話し手や書き手によって、しばしば「に」‘to’と混用される。前者は方向をもった運動の場合にのみ使われ、後者は運動の到達に用いられる。従って「北(きた)え行(ゆ)く」‘to travel northwards’は正しい表現だが、「北(きた)に行(ゆ)く」は正しくない。

峰(みね)え麓(ふもと)え降(お)り登(のぼ)り[8]。	Sometimese ascending towards the summit, sometimes descending towards the base.

[48]

[8]「世とともに峰へ麓へおりのぼり行く雲の身は我にそ有ける」(『後撰和歌集』雑一 1079)

「まで」は到達する限界を示し、その限界が時間か空間かに応じて ‘until’ や ‘as far as’ に翻訳されうる。

例

烏の頭白くなるまで。	Until a crow’s head becomes
江戸まで。	white. As far as Yedo.

「がり」は時折詩歌に見られる古語である。これは「へ」と同じ意味を持つ。

例：君がり[9]。　　Towards you.

対格（ACCUSATIVE CASE.）

「を」は対格の標示である。これは『言霊のしるべ』において与えられた「を」の定義、「「を」わ総て身に受入るようの心したるテニヲハなり」[10] の意味である。「を」は対格の付属物として、動詞の前においてさえ、絶対に必要なわけではなく、前置詞によって支配される対格とともに見られることは全くない。目的語であるということを、より目立たせたい箇所でのみ用いられる。

「を」はしばしば動詞の間接目的語に接続する。事実、二つの目的語があり、一方が直接目的語、それゆえ動詞に直接先行するもので、もう一方がいくつかの語が動詞との間に介在する間接目的語であるような箇所では、「家を相続する」‘to make a succession *to* his family’ の例のよ

---

[9]「沫雪尓 所レ落開有 梅花 君之許遣者 与曾倍弖牟可聞（沫雪に降らえて咲ける梅の花君がり遣らばよそへてむかも）」（『万葉集』巻八 1641）「音に聞く君がりいつかいきの松待つらんものを心づくしに」（『新古今和歌集』釈教歌 1959）

[10]「をは総て身に受入るやうの心したる辞也」（『言霊のしるべ』中編、『国語学体系』第 2 巻 p.82）

うに、直接目的語の「を」を省き、間接目的語には「を」を付加するのが習いである[11]。

やや似たような「を」の用法は、実名詞形式の動詞や形容詞の後に置かれる場合で、しばしば別の動詞による支配は無い。このような場合には、‘whereas’ ‘although’ または ‘nevertheless’ と翻訳しうる。

例

「いと」と「いたく」とわ、意味わ同じきを、使い様わ異なることあり。 ただ「江」とのみ言いては良からんを「江の水」など多く読むは僻事なり。	*Ito* and *itaku* have the same meaning; there are nevertheless differences in the mode of using them. Although it is sufficient to say *ye* and nothing more, ‘*ye no midzu*,’ etc., is constantly written. This is a mistake.

この種の「を」のかわりに、話し言葉で、また時には無頓着な書き手が「が」を用いる。

[49]

「を」は、自身と自身が付属する名詞との間に他の助辞が介入するのを許容する。

櫛とかんざしとを抜く。 こればかりを知る。	To remove comb and hair-pin. He knows this only.

詩歌や、ごくまれに散文において、「を」は時々文末に見られる。この場合、何らかの構文の倒置が生じているか、あるいは何らかの省略であれば補われるべきである。

[11] 例文「家を相続する」は、「相続」が動詞「する」に対する直接目的語で、「家」が間接目的語と考えている。「相続をする」の「を」は省略されるということ。

「を」の例

大路をよろぼい行きて[12]。	Staggering along the high road.
人突く牛をば、角を切り、人食う鷹をば、耳を切りて、その印とす[13]。	We cut off the horns of an ox which butts at people, and cut the ears of a falcon which bites people, as a mark to give warning of their vice.
宝を失い、病を設く[14]。	He loses his money, and contracts disease.
波路を遠く行く[15]。	To go far over the path of the waves.

間投詞の「を」もまた名詞の後に現れ、たぶんもともとは対格の標示と同じ語だが、対格とは区別しなければならない。

呼格（VOCATIVE CASE.）

呼格の機能が特定の助辞で表現されることはめったにない。だが、必要な時は「よ」「や」「やよ」のどれかを名詞に加えて表す。

奪格（ABLATIVE CASE.）

「より」「から」‘from’。「より」は動詞「よる」‘to approach’‘to relate to’の語根であるが、‘from’を意味する接尾辞として日常的に用いられる中で、この意味は忘れ去られた。「より」に対する古代の詩歌の形式は「よ」と「ゆ」である。「より」は後述するような句で用いら

[12]『徒然草』第175段。
[13]『徒然草』第183段。
[14]『徒然草』第175段。
[15]「しろたへの波路を遠く行き交ひてわれに似べきはたれならなくに」（『土佐日記』十二月二十六日）

れる時、つまり英語では形容詞の比較級が使用されるような箇所で‘than’に翻訳されうる。「桜より梅は早く咲く」‘the plum blossoms earlier than the cherry’。このような位置で「より」の代わりに「から」を用いることはできない。

「から」は「か あれば」‘since this is so’が縮約したものである。だがほとんどの用例において、これは単に「より」と同じである。古語においては「から」と名詞との間にしばしば「の」が介在する[16]。また、「てづから」「おのづから」のような語に類似の構造が現れる。動詞の後に‘because’の意味で「から」を用いるのは、話し言葉の用法である。[50]

「より」と「から」の例

昔より。	From antiquity.
馬車より落つる。	To fall from a horse or carriage.
大坂より。	From Osaka.
親より受くる。	To receive from one’s parents.
これから。	From here.
神のはらから。	The load’s brother.

《複数形の接尾辞（Plural Suffixes.）》

「ら」「ども」「たち」「がた」。複数形の語尾「ら」は人にもモノにも「われら」‘we’「これら」‘these things’のように使われる。副詞に付く「ら」はその副詞の意味をより不確定なものにする。例えば‘here’を意味する「ここ」と、‘herebouts’の「ここら」のように。「ら」は中国語の「等（*tō*）」や「們（*mon*）」に相当する。

「ども」は人にもモノにも用いられる。古語において非常に一般的な

[16]「安須欲里波 都芸弖伎許要牟 保登等芸須 比登欲乃可良尓 古非和多流加母（明日よりは継ぎて聞こえむほととぎす一夜のからに恋ひ渡るかも）」（『万葉集』巻十八 4069）

複数形の助辞である。近代語では通例、「わたくしども」‘we’のように一人称代名詞に結合する。

「たち」と「がた」は二人称に用いられるか、もしくは誰に対しても敬意をもって話す際に用いられる。

「など」は複数形の接尾辞と呼ばれることもある。これはラテン語の‘et cetera’にほぼ一致する。

複数形の接尾辞の例

子供(こども)ら。	Children.
なんじら。	You.
あるところの侍(さむらい)ども。	The samurai of a certain place.
この人(ひと)ども別(わか)れがたく思(おも)う。	I felt it hard to part with these men.
このことども。	These things.
親(おや)たち。	Parents.
おまえがた。	You.

「わ」は〈ハ〉と表記し、古代には間違いなく「ha」と発音された。「わ」の機能は、例えば『言霊のしるべ』に次のように記述される。「「わ」わいささか歎(なげ)く心(こころ)を帯(お)びて、ものにまれ、ことにまれ、あるが中(なか)より選(え)り分(わ)くるようの心持(こころも)てるテニヲハなり。」[17] 言い換えれば、「わ」は何かしらの感嘆の機能を持ち、そしてその意味は、数ある中からひとつのものや行為を選び、区別することである。

[51]

「わ」は、数ある中からひとつ以上の対象を切り出す、または選び出すだけではなく、ひとつの対象をもうひとつの対象と対比させるために用いられる。従って、ギリシャ語の「~μ ε ν ~δ ε」は日本語の「〜わ〜わ」にあたる。英語では「わ」は‘in respect to（〜に関して）’、

[17]「ははいさゝか歎く心をおびて物にまれ事にまれ有が中より撰分るやうの心持る辞也」（『言霊のしるべ』中編、『国語学体系』第2巻 p.79）

‘in the case of（～の場合）’と翻訳できることもあるが、大多数の用例においては名詞を強調することによって、もしくは書くときはイタリック体を用いることで、より充分に表現される。フランス語の「quant á」が、なかなか的確にこの機能を示す。大抵の場合「わ」の機能はとても微弱で、その有無が意味のうえで明確な違いを生むことはない。

格の接尾辞と疑問の助辞「か」は、「わ」と名詞の間に置かれる。「を」が介在する箇所では、「わ」は「にごり」を帯びて「ば」となる。これは日本語が、二つの連続する音節が同じ子音で始まることを許容するのを嫌うためである。

「わ」の例

明石の浦わ。	What about the Bay of Akashi ?
このところへは来たらず。	He has not come to this place at any rate.
この格に叶わぬが多きは皆誤りなり。	The numerous cases of disagreement with this rule are all errors.
これとわ違う。	It is different from this.
「けん」わ過去を疑うことばなり。	Ken is a word which expresses a doubt concerning the past.
人突く牛をば、角を切り、人食う鷹をば耳を切る[18]。	We cut off the horns of an ox which butts at people; we cut off the ears of a falcon which bites at people.

「か」は疑問符（「?」）と同じ意味を持つ。この用法は元来、相手に質問することに限定されていたが、自分自身の心中のあらゆることに関する疑いを表わすためにも用いられるようになった。一般的な意味においては「や」に似ているが、「か」は「や」よりも強い疑いを表し、それゆえ、どちらも適当な場合が多くある一方で、「か」と「や」は区別しなければならず、場合に応じてどちらかしか使用できないことも多くある。「か」は

[18] 脚注 14 に同じ。

情報を目的として質問し、「や」はただ疑問を提起するだけである。

[52]

「か」はたびたび「たれ」や「いづれ」のような別の疑問詞（interrogative）の後に見られる。そうした例においては、「か」は余分に思われる。

「か」の例

これか？	It is this ?
これか知らず。	I do not know whether it is this.
川辺の蛍か、	Is it the firefly on the river-bank, or
海人の焚く火か？[19]	the fire kindled by the fishermen.
何とか言う人。	Mr. ‘what do you call him.’

「かな」は疑問の助辞「か」に間投詞「な」が続いたものである。これは二つの助辞を合成した意味に過ぎないこともあるが、それ以上に、同情の感嘆（exclamation）として用いられることの方が多い。その場合は ‘alas!’ と訳す。

「かな」の例

運の良き幸せの娘かな？	Is she not a fortunate girl ?
恐ろしきかな！悲しきかな！	How dreadful ! How lamentable !
人の心おろかなるものかな。	Alas ! what a stupid thing the heart of man is !

「や」は疑問符と感嘆符の組み合わせ（「?」＋「!」）によって表現される。これは間投詞であると同時に疑問を示す助辞であり、英語の「how!」と多少似たような用法である。通常、両者の意味を組み合わせるが、どちらか一方に偏ることもある。「や」はしばしば「or」に訳される。

[19]「晴るる夜の星か河べの蛍かもわがすむかたのあまのたく火か」（『伊勢物語』第八七）

「や」の例

美作(みまさか)や！久米(くめ)の佐良山(さらやま)[20]。	Do I say Mimasaka ! nay let me rather speak of the *Kume no sara* mountain.

これは美作の地にある「久米の佐良」山を紹介する際の強調法である。

花(はな)や紅葉(もみじ)を見(み)る。	To look at the flowers or (preferably) the maples.
これやと思(おも)う。	I think it is perhaps this.
親(おや)や親類(しんるい)。	Parents or friends.
猿(さる)にもや類(るい)すべし。	I am not sure that he should not be classed even amongst monkeys.
あな！面倒(めんどう)や！	Ah ! I' m going to have trouble.

[53]

「やら」は書き言葉の「やあらん」に由来する口語体である。例：「半八とやら申す者」。'A fellow called Hanhachi if I remember rightly.'

「な」または「なん」は話し言葉の「な」「なあ」または「ね」（江戸方言）と同じ助辞である。先行する語に強く注意を引きつける強調の感嘆である。これは「ぞ」に似ているが、それよりも強調の弱い語である。「なん」は、おそらく文に挿入句的に差し込まれた、廃れた動詞「ぬ」'to be' の未来である。

「な」または「なん」の例

これわな良(よ)きものなる。	This then is a good thing.
これなんそれとうつせみんかし[21]。	I would like to see this exchanged for that.
これなん梅(うめ)と知(し)りぬる。	I found that this was a plum.

[20]「美作や久米の佐良山さらさらにわが名は立てじ万世までに」（『古今和歌集』巻二十 1083）

[21]「袂よりはなれて玉を包まめやこなむそれと移せ見むかし」（『古今和歌集』物名 425）

形(かたち)よりわ心(こころ)なんまさりたり。	Her heart was more excellent than her beauty.

「ぞ」は強調の助辞である。『言霊のしるべ』は「ぞ」について「ものを限定し、狭める助辞、あるいは、あたかもそれを取り上げて手に持つかのように表現する助辞」[22] と述べており、「意味のうえで「や」の反対である」と付け加える。「ぞ」を翻訳する最適な方法は、たいていの場合、以下の例にあるような方法に従って文の構成を変えることである。

「ぞ」の例

これぞ正(ただ)しき読(よ)みざまなる。	It is this that is the correct mode of reading.
唐(から)の歌(うた)にもかくぞあるべき。	This is probably true in the case of Chinese poetry too.

「こそ」は意味が「ぞ」に似ているが、さらに強い強調の言葉である。『脚結抄(あゆひしゃ)』[23] は「米(よね)こそ良(よ)けれ」'it is rice and rice only that is good' について「米(よね)のほかは無(な)しというなり」と述べる。即ち、「これは、米しか無い（これが良い）と言っているのである」。『脚結抄(あゆひしゃ)』は「こそ」について、さらに、「選び出してその他のものを拒む機能と、言及する対象を手中に取り上げて見る機能とを持っている」と述べる。これは次の例のように、「ぞ」と同じように訳す。

[54]

「こそ」の例

よろずの病(やまい)わ	It is strong drink alone from which

[22]「ぞは物を限て狭くさし又物を手に取入るが如き心の辞なり」（『言霊のしるべ』中編、『国語学体系』第 2 巻 p.83）

[23] 原文「Ayuhisha」。誤植か。正しくは「Ayuhisho」。

酒よりこそ起これ[24]。	all diseases spring.
昔わ「天の下」とのみこそ言えれ。	In ancient times, the only form of expression was *'ame no shita.'*
「つつ」わ「つ」のテニヲハをかさねたるものにこそあれ。	Tsutsu is *nothing more than* a reduplication of the suffix *tsu*.
蓬莱の木かとこそ思いつれ[25]。	I had imagined that it was doubtless *none other* than the tree from Mount Horai.

「も」は英語の 'too' 'also' 'even' に対応する。「も少し」'a little more' の句にあるような 'more' の意味は、話し言葉に特有のものである。「も」は多くの場合、驚きの感嘆に過ぎず、特定の意味を持たない。

「も」はしばしば、「ある」'to be' の命令形「あれ」と縮約し、「いづれにまれ」'be it whichever it may' の句のようになる。

「も」の例

これもかれも。	Both this and that.
この世も後の世も。	Both this world and the next.
これも良し。	This too is good or even this is good.
見まれ見ずまれ[26]。	Whether I see *or* not.

「と」は接続の助辞である。「彼と我」'he and I'「君と行く」'to go along with you' の例のように、名詞を伴うものはほぼ 'and' 'with' 'along with' と翻訳できる。

五つの動詞「見る」'to see'「聞く」'to hear'「思う」'to think'「する」

[24]「百薬の長とはいへど、万の病は酒よりこそおこれ。」(『徒然草』第 175 段)

[25]「まこと蓬莱の木かとこそ思ひつれ。」(『竹取物語』)

[26]「君といへば見まれ見ずまれ富士の嶺のめづらしげなく燃ゆるわが恋」(『古今和歌集』恋四 680)

‘to do’「言う」‘to say’のうちのひとつが続く場合に、名詞に後続する「と」の用法は、間接話法に挿入される英語の接続詞‘that’のような、動詞を伴う「と」の用法と類似する。「と言う」はしばしば、特に詩歌において「チョウ」「チュウ」と縮約される。名詞の後に上述した五つの動詞のひとつ（一般的には語根形式＋「て」の形で）が補われて意味を完成させなければならないような位置に、「と」が単独で存在することも多い。従って「とて」はしばしば「と思いて」「と聞きて」などを表す。

[55]

「たる」は「と ある」の縮約で、「主人たる人」‘a man who is a master’の句のように名詞が先行する。この形式は詩歌にはめったに見られず、古代の言語では決して現れない。

「と」の例

人の言葉とみづからの言葉。	Another’s words and one’s own words.
これと違う。	It is different from this.
雨と降る（詩歌的）[27]。	To fall like rain.
雪と散る桜の花。	The cherry-flowers which scatter like snow.
夏と秋と。	Both summer and autumn.
留守居と定むる。	To appoint to the office of rusui.
子たる（とある）もの。	One who is a child.

「づつ」は次の例のように、‘at a time’‘apiece’を意味する。

ひとりづつ入る。	To enter one person at a time.

[27]「立ちとまりみてをわたらん紅葉葉は雨と降るとも水はまさらじ」（『古今和歌集』秋下 305）のような例を想定したものか。

鳥の子十づつ。	Young birds ten at a time.
皆に四つづつ与ゆる。	To give them all four apiece.

「だに」は肯定の動詞を伴う場合、‘at least’を意味し、否定の場合は‘even’を意味する。次の例のように、あるものが期待よりも少ないことが話題にされる場合に用いられる。

一文字だに知らぬもの。	A person who does not know even a single letter.
毛一筋をだに動かしたてまつらじ[28]。	I will not move even a single hair.

「すら」もまた‘even’と翻訳されるが、例にあるように、あるものが期待より多く提示される場合に用いられる。

聖人すら。| Even a sage.

「さえ」は‘this, if no more（それ以上なければ、これ）’‘this at any rate（少なくともこれ）’を意味する。これはしばしば「だに」の代わりに使われる。

[56]

例

今さえ。	Now, if not sooner. At length.
金さえあれば。	If there is only money.

名詞の後にある「し」は、おそらく「と して」を意味する。これは‘only’と翻訳されうる。

[28]「今より後は、毛の一筋をだに動かしたてまつらじ」（『竹取物語』）

「し」の例

きみ恋る涙し無くば。	If there were only no tears of longing for you.
しかしあらば。	If this were only so.
崩御[29]のおりしも。	Even at the very time of the Emperor's death.
おのれし。	By themselves.

「のみ」と「ばかり」は数量の限界を意味し、'only' と翻訳される。

例

六つばかり。	Only six.
君のみ。	You only.

「ながら」は、この助辞が後続する対象が、変化も修正も無く理解されることを意味する。

例

旅の姿ながら。	In his travelling dress as he was, or, without changing his travelling costume.
露を枝ながら見よ。	Look at the dew as it lies on the branch.

【引用文献】

福井久蔵編輯（1939）『国語学大系』第 2 巻、国書刊行会

小島憲之、木下正俊 校注（1995-6）『萬葉集 1-4』（新編日本古典文学全集 6-9）小学館

[29] 原文「hōshō」。誤りと考え、「崩御」とした。

小沢正夫、松田成穂 校注（1994）『古今和歌集』（新編日本古典文学集 11）小学館
片桐洋一 校注（1990）『後撰和歌集』（新日本古典文学大系 6）岩波書店
田中裕、赤瀬信吾（1992）『新古今和歌集』（新日本古典文学大系 11）岩波書店
片桐洋一、福井貞助、高橋正治、清水好子 校注（1994）『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（新編日本古典文学集 12）小学館
菊地靖彦、木村正中、伊牟田経久（1995）『土佐日記 蜻蛉日記』（新編日本古典文学全集 13）小学館
神田秀夫、永積安明、安良岡康作 校注（1995）『方丈記 徒然草 正法眼蔵随聞記』（新編日本古典文学全集 44）小学館